



Mary's Blood、ガールズ・メタルの枠を超えた完成度のメジャー・デビュー・アルバムをリリース！

EYE (Vo) SAKI (Gt) RIO (Ba) MARI (Dr)
インタビュー：米沢 彰

―激ロックとして初めてのインタビューとなりますので、お1人ずつ自己紹介をいただいてもいいですか？

EYE：ヴォーカルのEYEです。自分で言うのもなんですが“カッコいい女”目指して、ライブではシャウトで煽りを入れたり、アルバムの中では結構至まで歌ってます。
SAKI：ギターのSAKIです。最近はいどルにハマって、BABYMETALとかLinQとかSIAM&POPTUNEっていう子たちのCDを聴いたりDVDを観たりしてます。
RIO：ベースのRIOです。毎日本気で生きてます。よろしく願ひします。
MARI：ドラムMARIです。激ロックに載ってるようなラウドロックとかメタルのバンドがすごい好きなので、今回取材をしていただけるのがすごく嬉しいです。スラッシュ・メタルが好きで、スロデスも好きで、ツーバスを踏みまくる激しいドラマーを焼きたいと思っています。

―メジャー・デビュー・アルバム「Countdown to Evolution」のリリースおめでとうございます。

全員：ありがとうございます。

―メジャー・デビューの実感がありますか？

SAKI：特にはその実感はないですが、関わる人が増えたなというのは1番感じますね。EYE：バンドのメンバーにはなんにも変わらないです。今まで通り、更に激しい活動ができるかな。と思っています。
MARI：久しぶりの人も含めてみんなから“おめでと”とか“頑張れ”とかっていうメッセージをいただけるのはすごく嬉しいですね。

―メジャー・デビューと共にバンド名の読みも順り通りの“メアリーズ・ブラッド”に改めましたが、その経緯や意図を教えてくださいませんか？

EYE：順り通りだと“s”を発音するのが正しいんですけど、今までは読んだときのニュアンスを考えて、敢えて“s”を読まなかったんです。日本だけじゃなくて海外の人にも聴いてもらえるバンドになりたいというのもあるって、ストレートに順のまま読ませようという理由で変えました。

―MVが公開された「Marionette」のイントロを始め、HR/HMシーンへの様々なオマージュやリスベクトを感じるのですが、実際に意識して制作したことがあれば教えてください。

MARI：基本的に好きだしリスベクトはもちろんあるんですが、ライブでお客さんにたくさんってほしいとか考えながらオーソドックスなリズムを表現してみたら、近いものがたまたま出てきた感じですね。
EYE：狙って、というよりはいろいろ試してそこに落ち着くっていう感じでしたね。

―なるほど。ちなみにアルバムのタイトル「Countdown to Evolution」はどういった意図や意味でつけたのですか？

MARI：メジャー・デビュー第1弾ということなので、何かがスタートする前のドキドキ感みたいなものも演出したかったですね。とにかくこれから進化していくぞっていう、意気込みを込めてこのタイトルにしました。

―MEGADETHと関係あったりしますか？

MARI：たまに言われますね。分かる人がニヤッとすればいいかなと思っています。

―そしてMarty Friedmanからのコメントももらっていますね。

SAKI：そうですね。まさか、Marty様からコメントをもらえるなんて……。ほかにも凄い豪華な方がたたらコメントを頂いて。

―すごいですよね。

SAKI：高見沢さんやMartyさんはダメもとで聞いてみたら、なんと引き受けてくださったっていう。あとは、ちょっとずつ交流のあるかたもいるんですけど。

―デーモン閣下もすごいですよね。

SAKI：デーモン閣下もくだいしましたね。しかも長文で。

―最後の方なんかノリノリですね。

メジャー・デビュー第1弾ということなので何かがスタートする前のドキドキ感みたいなものも演出したかったですねとにかくこれから進化していくぞっていう

SAKI：お願いした時にご自身で調べてくださったのか、みんな“メアリー・ブラッド”って書いてたらこういふに書いていたみたいで、すごく良かったなって思いましたね。悪魔なので“良いかだ”って言っちゃいけない気がしますけど（笑）。

―好きなアーティストに1番に挙げてますよね。

SAKI：聖闘魔IIが本当に好きなので……。こうしてアルバムを出せて良かったですね。

―HR/HMシーンに対する敬意を見せながらも、ヴォーカル・ラインはキャッチーなツガを外さない構成が非常に上手いと思われましたが、作曲のプロセスはどのように進められているのでしょうか？

SAKI：1コーラスくらい作ってきてメンバーに投げたり、フルで作るものはフルで作ってきて、最後はみんなてスタジオで合わせていく感じですね。

―大きく展開していく曲が多く、サウンドの幅広さを感じさせますが、楽曲の構成やサウンド面で意識したことや狙っているポイントなどがありましたら、教えてくださいませんか？

EYE：狙ってるものもあるんですけど、今からはアレンジャーさんが付いてくださって、それでいろんなエッセンスも入ってきて、その中で色が変わった曲も何曲もありますね。デモの状態から変わらなかった曲ももちろんあるんですけど、それは狙ったというよりもインスピレーション重視ですね。
MARI：やりたいことを詰め込んでいったらこうなっていくみたいない感じがですね。

―ちなみに今回の制作に関しては、プロデューサーとアレンジャーが入ったのでしょうか？

EYE：そうですね。
SAKI：プロデューサーはSteveというスウェーデンの人ですね。
MARI：たまたまライブを観てもらって、気に入ってもらって、そこからスタートしました。

―Steveさんは表には出ないんですか？

SAKI：表にはあんまり出ないですね。日本語も上手い、面白い外人です（笑）。

―じゃあ日本にいるかたなんですか？

SAKI：ずっと日本にいるかたですね。

―サウンド全体としては聖闘魔II的な洋楽志向のJ-ROCK、ジャパニーズ・メタルのテイストですが、ヴォーカル・ラインだけ取り出すと、J-ROCKやJ-POPにも近いんですね。

MARI：バンドのコンセプトとして、ヴォーカル・ラインに関してはJ-ROCKとかもっと伝わりやすいメロディを出したいというのが最初からありますね。
EYE：キャッチーで日本人でも聴きやすく入ってやすいメロディをずっと心掛けていますね。ただ、後者がすごく激しくて、普通に歌っただけでは負けてしまうので、今作では激しい方を激しめにしようと思ひながら歌っています。

―一曲の構成としてはけっこうギター・ソロを活かすようなところがあるなと思いました。

SAKI：長いですねー（笑）。
一同：（笑）
SAKI：Steveがうるさくて。

―どういうことですか？

SAKI：もっと長くしろとか。

―そっちなんですかね。

SAKI：音数を増やそうって話しても、結構弾いてますね。

―いわゆるシェレディング的なものももちろんですけど、チョーキングが多くて、女性のギタリストなのにすごくないかとも思ったのですが……。

SAKI：もともとQUEENが好きだったり、Y&TのDave Menikettiみたいなギター・ソロが弾けたらいいなと思って練習してきたので……。チョーキングが特に辛いということはないですね。

―ギターに限らずですけど、他のパートも手数が多かったり、ベースも音数が多いパートが結構あると思うんですが、テクニク面で意識したことはありますか？

MARI：テクニクからは少し離れますが、「Coronation Day」はテンポも速い2ビートで、今までのMary's Bloodの曲ではなかったテイストになりましたね。私が初期のSEPULTURAとかCARNAL FORGEみたいな、ああいうものを今までずっとやりたかったのもあって、テクニクにこだわったというよりはリズムでやりたいものを表現できたという曲が他の他にも結構入っていますね。
R：ベースに関しては、とりあえず曲を壊さないようにしました。動けるところは動きたいし、ガンガン刻めるところは刻みたいし、ちょっとした自己主張も入れつつバンドを壊さないようにしてますね。

―ベース・ラインは意識して使い分けてるな、って感じしました。

R：ギターとかドラムがガンガン鳴ってる中でベースもガンガンくるとクドいですよね。だから、合間合間の隙間で主張を入れています。でもこのアルバムで隙間を見つけるのは大変でした。

―歌詞もすごくJ-ROCK的というか、シンプルで分かりやすいですね。あんまり英語を使わない曲が多いのも印象的です。

EYE：そうですね。英語ってすごく響きがかっこいいし、そういうのも歌ってきたいなっていうのもあるんですけど、やっぱりまずは伝わらなければいけないっていうものもあるし。日本語ならではの言葉の重みというか、同じ意味でもいろんな単語があったり、そういうのを大事にしていきたいと思ってますね。今回のアルバムの歌詞って全曲女性主人公の歌詞なんですけど、激しい曲に女の子の内幕がのってたらギャップが面白いかなっていうものもありますね。

―歌詞は全曲EYEさんですね？

EYE：そうですね。今まではSAKIちゃん書いてたりとかあったんですけど、今回はそういうテーマに基づいて私が全部書いていますね。

―昨年は“ANIME MATSURI”のメイン・アクトとして海外でもやっていますよね。

EYE：メイン・アクトでやらせていただきました。ありがたい限りです。

―どのくらいの規模だったんですか？

EYE：3,000人入ってて、ステージがすごく広くて……。広すぎて逆に緊張しなかったですね。

―現実感がなくなっただけでございすか？

EYE：現実感がなくなって、ただただ楽しんたっていう感じでしたね。ネットに上がってる曲とかは日本語の歌詞なのにお客さんがみんな日本語で歌ってくださって、感動しましたね。みんな意外と素晴らしい（笑）。
SAKI：向こうで1番びっくりしたのが、バラードのときにダイヴしてる人がいて、もう自由な一ツて。
EYE：ANIME MATSURIというだけあって、コスプレの人がいるんですよ。コスプレした状態でバラードで転がります（笑）。
SAKI：ONE PIECEのサンジがクラウド・サプしてたんですよ（笑）。それもすごく新鮮で、とにかく楽しかったですね。帰れば一緒に楽しんでもくれるのか、そういうレスポンスの良さも今まで体感したことがなかったのて、楽しかったです。日本に帰ってきてから、ライブに対する取り組みも意識が変わったりしましたね。

―全然ノリが違っって聞きますね。

EYE：自由でしたね（笑）。
MARI：雰囲気もすごく開放的で、ライブ会場もそうなんですけど、空港に降りた時点からもう開放的で、海外で1本ライブをやったことで自分の自信にもなったというか、もっといろんなところでやれんんじゃないかっていう気持ちにもなりましたね。

―リリース後の予定は決まっていますか？

MARI：ワンマン・ツアーが9月23日から東名阪と決まっていますね。その前にも8月22日、23日には名古屋でイベントがありますね。今まではワンマンは東京だけだったのて、東名阪のワンマンでいろんな曲を披露できた良いなって思ってます。

―先日のREXでのライブも拝見しました。パワフルなパフォーマンスで、ガールズ・バンドのイメージからは少し離れたようにも感じましたが、パフォーマンス面で意識していることはありますか？

MARI：腹あらは痛る（笑）。
EYE：お客さんと一緒に楽しむのがライブだと思っているので、壁があってはいけないという気持ちがありますね。お客さんと一緒に歌ってくだたら嬉しいですね。

―2009年の結成から今回のメジャー・デビューまでの4年半という期間はいかがでしたか？

MARI：このメンバーでスタートしたのが2012年の頭くらいで、ちょうど2年半くらいという感覚が強いんですね。でも、その前にも作品があって、それもひっくるめてMary's Bloodだし、結成当時からバグの演奏の楽しさや、歌メロはキャッチーなものもあつていう、そういうところは変えずに、この1stフル・アルバムまでぶれずに持ってきたというのは満足していますね。

―最後に、激ロックの読者に向けてメッセージをお願いします。

EYE：激ロックの読者のかたに聴いていただくのにふざわしい1枚ができました。激しい要素がすごくたくさん入っていて、聴いたら“お”でテンションを上げてもらえるような1枚になってると思うので、スピーカーの前でテンションを上げながら聴いてもらえたら嬉しいですね。

